水利を利した運河は今も材料運搬として利用され現代は騒音、粉塵公害を避ける意味でメリットがあると思った。

ローマからナポリへ通ずる「太陽の道路」は昭和初期にムッソリーニが軍用道路として建設したものだが現在高速道路として使われている。恐らくムッソリーニは過去の栄光に輝くローマ帝国の再現を願うか、ローマへの道は世界に通ずるという志のもとに建設したものだろうが。彼なき後、立派にハイウェイーとしてイタリア人に使用されており、その意味でも先見の明のあった人物と思う。

暑い太陽の国、ローマ、ナポリ、陽気なイタリア人に比較してロンドンは緑の多い保守的な古い都市、かって七ツの海を支配した大英帝国の首都として実に地味な街でイギリス人の服装までがグレイ、濃紺、黒色の背広着用とはお国柄とでもいうべきだろう。

滞在が僅か一日の故もあり強烈に印象に残るのはバッキンガム宮殿の衛兵交替儀式及び現在も貴族、ミドル、平民という階級制度が厳然として生きている事は奇異に感じられた。

しかも現首相のサッチャー夫人はミドル出身との事であり、低落の傾向にあったイギリス経済が北海油田開発によって、自給自足の見通しがついた為かポンドが強い傾向にある事が印象的であった。

最後に今回視察した欧州５ヶ国は現時点ではＥＣ諸国の一員としてお互いに協力体制を取っているが過去の歴史を振りかえると、征服したり征服されたり或は侵略したり同盟を結んだりの攻防の繰り返しで陸続きの国家の存立の難しさを感じる。

日本のように周囲を海に遮ぎられた島国で、且つ単一民族には考えられない複合民族として大らかな大陸的な一面が見受けられ、日本民族の短兵急な性急さは大いに反省せねばならない処だろう。

例えば、「ローマは一日にしてならず」という諺があるが、イタリア民族の性格もあるが、別な観点から眺めると僅かなものにこせこせしない大らかさの表れであり、日本民族も今少し他民族の血を受け入れて複合化し、目前の事しか考えない性急さを改めて100年後或は200年後の国家の大計を目論み誇り高い民族でありたいと願って報告を終ります。

第二団地組合員の顔ぶれ

第一団地満パイに伴う第二団地建設の補完事業は、昭和48年、49年に用地取得・造成を行い、50年度より組合員建屋の建築に入っております。途中、オイルショック等による不況の為入居が遅れておりましたが昨年より入居者が増え、余剰地もあと４区画を残すのみとなりました。ここに第二団地組合員の御紹介を致します。

昭和50年度建築

共栄電気㈱	社長	高桑　清	電設資材卸
北陸ペイント㈱	社長	山田　修三	塗料卸
㈱立元商店	社長	立元　義雄	電設資材卸
㈱紙谷物産	社長	紙谷　邦蔵	生鮮食品卸

昭和51年度建築

塔島㈱	社長	塔島　健治	毛糸婦人衣料卸
三和通商㈱	社長	戸田　幹雄	建築資材卸
ハットリ産業㈱	社長	服部　厚三	ポリエチレン袋卸
福助㈱	社長	辻本　博	下着靴下卸

昭和52年度建築

㈱内外電機製作所	社長	丹羽　史朗	分電盤等電気関係卸
㈱賛協	社長	多田　成喜	メリヤス婦人衣料卸
㈱たなかや	社長	田中　清隆	タオル作業衣卸

昭和53年度建築

㈱トオル	社長	本橋　徹	婦人衣料卸
㈱ボニータ	社長	伊登　真	婦人衣料卸

昭和54年度建築

東洋精器工業㈱	社長	前中　哲	タイヤ機械卸
カトー産業㈱	社長	加藤　肇夫	体育用品卸
金沢シュランク㈱	社長	小森外次郎	毛織物縮絨
㈱丸吉	社長	吉田　繁	建材卸

昭和55年度・昭和56年度建設予定

岩崎㈱	社長	岩崎　直一	婦人服地卸
相川商店	店主	相川　徳雄	和装小物卸
大栄成型機械㈱	社長	高島　徳一	板金機械卸
大王製紙㈱	社長	井川伊勢吉	紙卸
南陽㈱	社長	中村　弘	建材卸
北国書林㈱	社長	嵯峨　逸平	書籍卸
㈱電陽社	社長	東　治郎	電気機器卸
丸石自転車㈱	社長	藤本　泰雄	自転車卸
㈱土谷九兵衛商店	社長	土谷　茂	ロープ金物卸
小川商事㈱	社長	小川　三郎	婦人服服地卸

協同組合 金沢問屋センター

第15号　1980年1月発行
協同組合　金沢問屋センター
発行者　小川甚次郎
金沢市問屋町1丁目
電話　37－8585

激動の80年代初頭にあたって

協同組合　金沢問屋センター
理事長　小川甚次郎

組合員の皆様、明けましておめでとうございます。157社が揃って無事に越年され、ここに1980年代の初頭を新たな希望と決意をもってお迎えできますことを心からお喜び申し上げます。

かえりみますと早いもので昭和38年10月に組合設立以来、幾多の困難を乗り越えて17年目の春を迎えるわけであります。さて、昨年は景気の回復が期待された年でありましたが、円安と産油国側の原油輸出制限等の影響により、私共企業にとっては全く期待はずれの苦しい年でありました。昨年は組合運営の最重点として、第二次補完事業の促進を取り上げ、皆様のご協力と関係ご当局のご指導とご援助を得て、新規組合員の加入に全力をあげたところ、新たに六企業が加入し、現組合員三企業より増坪申し込みもあって、余剰地は残り少なくなり、２、３の企業を除き本年度で店舗の建設を完了する予定になっております。

お蔭様でその他の組合事業も各委員会ごとに活発に実施されまして、組合運営も至極順調に進んでおり、大変喜ばしいことであります。経済情勢はあらゆる悪条件が加わり益々深刻の度を増し、前途は決して楽観することができないものと推察されます。私共はこのような深刻な経済環境の中にあって、今まで以上に共同意識を強め、各自の企業防衛と組合運営に一層の努力を傾注しなければならないと痛感しております。何とぞ皆様のご協力をお願いする次第であります。

終りに組合員各位並びに従業員にとって、この新しく迎えた年が本当に良い年でありますように心から祈念いたしまして私の年頭のご挨拶といたします。

今始まる、80年代の金沢問屋センター

― 昭和55年新年互礼会 ―

昨年暮れから降雪をみることなく新年を迎えた初顔合せの1月4日に、恒例の互礼会が問屋センター会館にて、多数の参加者のもとに、新春の喜びをもって、めでたく開催された。

新時代の幕あけは、当金沢問屋センターにおいても組合員各企業経営にとっても、80年代が制約の多い困難な時代であり、模索の時代であるともいえる。参加者並びに来賓から、80年代の始まりにふさわしいご挨拶があった。

まず、金子専務理事の司会により、小川理事長から年頭にあたり、「'79は政治、経済ともに混迷の時代であったが、'80を迎えた今日、団地結成後17年目、団地完成後13年目を迎え、感無量である。組合員商社157社が、立派な団地を基に、景気回復を期待しつつ、厳しい経済環境に立ち向って、それぞれが企業体質の改善をはかり、強固な基盤をつくりあげて欲しい。」とされて、各企業の発展を祈願すると結んで挨拶があった。続いて来賓の中西知事から、157社が健勝で越年された喜びを冒頭に述べた後、「石油問題はもとより国の内外に問題を山積している中で、景気の方はまあまあといえるかもしれないが、60年代、70年代とセンターは事故もなく立派に精進してきた。県、国をはじめ、センターには日頃お世話になっており、'80年代の入口ですが、これからもひき続き、県政に一生懸命頑張りたい」と力強いご挨拶があった。

ひきつづいて、江川市長は先に指名されたのも問屋センターのことについてもっとしっかりやれというお叱りであろうと思うと述べ、会場をわかせつつ、「17年前のことと、今日の変り方、繁栄のしかたは目を見はるべきものがある。団結の力というか、企業に対する努力というか、役人であろうともこういった企業意識は持つべきである」と冒頭に述べつつ、「80年代は地方の時代とか文化の時代といわれるが、下水道処理公園整備、地方鉄道等まだまだ足りない」と反省していることを告白しつつ、会場から拍手がおこった中でさらに、今年のサル年にちなんで、「集団生活をボスのもとに活動しているサルと同じように、業界の力、集団の力をセンター組合の精神の中に感じる」と結んで挨拶を終えた。さらに、金沢商工会議所宮太郎会頭より、本年3月に北陸自動車道が名神につながることから、岡山・広島の問屋センターと岐阜のそれを比較しつつ、「現象的にはプラス、マイナスの変化がおこる年であろう」と予想されつつ「金沢問屋センターがプラスの形で左右するものであると確信する。しかし地方にとって、これから厳しい要素が加わってくる中で、北陸自動車道の交通開通が、プラスにつながることを願う」と結ばれた。

四氏のご挨拶のあと、今井県会議員の音頭で乾杯をし、祝宴に移った。

出席された来賓の奥田氏、安田氏、島崎氏の各代議士の方々からもお祝詞の御挨拶を頂き、また森代議士他多数の方の祝電紹介の後、市議会議員の宇野氏の音頭で万才三唱をして、あらゆる現象にモヤがかかった80年代、この予測困難な厳しい時代に、金沢問屋センターが力強く歩んでいくことを誓って会を終えた。

年男大いに語る

見る、聞く、大いに語る

㈱ 寿 商 会
若林 保四

広報委員会からあなたは今年歳男だからちなんだ話を原稿にまとめて出して下さいと頼まれました。書くことの不得手な私ですが頑張ることにしました。昔から伝えられる見まい、聞くまい、語るまい、の猿にまつわるお話を申しのべて見たいと存じます。昨年春に中国10日間の旅の中で北京のみやげ物百貨店で石の彫刻にこの三猿が陳列されていました。何時の時代からの物語かは知る由もありませんが、恐らく中国から我が国へ伝来したのではないかと存じます。さて新年本日の現況はソ連軍のアフガン進攻に伴う問題、イランの米国大使館人質問題と此の後の石油供給並に価格問題、加えて円安、ドル高、公共料金、物価の値上り傾向などに伴う今後の企業経営の問題等々、山積する諸問題をかかえて80年代の第一年目を歳男で迎えました。そこで私は72才の申ですが見まい、聞くまい、語るまいを次に申し上げるように総べて逆に考える時代として本年は積極的に実行しながら時の流れを皆様と共に見守り、企業の前進を計りたいと存じます。

先ず第一に見まいを「大いに見る」に変えます。常に正しい決断をくだすために広い視野で鋭い目を業界及び国内、世界事情に向けます。第二には聞くまいを「大いに聞く」に変えます。常に的確な情報を集めることに努力し、あらゆる人のお話を拝聴し、又社会情勢、並に業界の動きに耳を傾けます。

次に第三は語るまいを「大いに語る」に変えます。大きく見、大きく聞き、そして私の決断したことを基本に業界、地域社会、問屋センター発展に役立つことならば大いに語り大いに伝達したいと思います。以上私の心構えばかり申し上げて恐縮ですが皆様のお許しを願うことにしてこれで終ります。

還暦を迎えて

明希株式会社
石黒 伝六

暦と申しますと多種多様でありますが明治3年に陰陽暦が廃止される迄、我が国では土御門家が代々50数代にわたり勅許を得て暦の作成をしており、我が国最古最高峰の暦の元祖であります。その元祖の安部晴明は唐の国を訪れた時、城刑山のふもとにて伯道仙人を師として天文暦日の奥儀を極め金鳥玉兎集をさづかって帰国した平安朝の大学者であります。

暦は10干と12支の組合せによって出来ております。10干とは甲（きのえ） 乙（きのと） 丙（ひのえ） 丁（ひのと） 戊（つちのえ） 己（つちのと） 庚（かのえ） 辛（かのと） 壬（みずのえ） 癸（みずのと）であり、12支とは子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥であり互いにこの順序で組合せになっております。大正13年は甲子の年であり、14年乙丑……10年目に甲が還り甲戌、乙亥となり13年目には丙子という様に組合った年が還って来るには60年を要する。この様に人の生れた暦年が60年目に還って来るので還暦というのである。大正13年の甲子は昭和59年に還って来ます。甲子園球場の名称は大正13年に出来たので暦年にあやかって名付けたといわれる。私は1920年7月10日の生れで大正9年庚申の年であり、昭和55年は庚申の年で私は還暦を迎えたわけで次の還暦は60年後ですからとても生きられるわけではなく、人生に一度の還暦年と考えられます。

人間は生をうけますと成長し、やがて結婚し子供を持ちますが、その子供が成長し己の後継者として育てるために働き努力するが、これを還暦までに完成させる事が出来る人は最高に幸福な人というべきだと思います。そして還暦後は10年か30年か判りませんが余生を安楽に過して死を迎える。これが人生であると謂われます。此の方程式通りに事を運ぶ事は凡人の私には出来そうにもありません。これ又人生かも判りません。

私達業界の大先輩、エーザイ株式会社の創始者故内藤豊次先生は、東京田辺製薬株式会社を55才の定年で退職したあとを第2の人生としてエーザイ株式会社を創業し、今日ベスト10に入る素晴しい製薬会社に育てられたが、勿論60才還暦で余生をなんという生やさしいものではありません。そして昭和41年77才の喜寿の年に長男祐次（現エーザイ社長）に全権を移譲された。

昭和44年には全財産を投じて財団法人内藤記念科学振興財団を設立し、昭和46年に総合くすり資料館を開館し世の医薬界の為に奉仕せられていたが惜しくも昭和53年3月20日89才にて永眠された。本当に素晴しい人生を歩まれた人であります。

還暦と申しましても、又1才からやり直すのだと考えなければなりません。今日寿命も相当延長している故なお一層その感を深くします。故内藤豊次先生にあやかって第2の人生を歩み、少しでも世の為、人の為に奉仕出来ればと考えております。

不測の年代こそ チャンス

石川トヨペット株式会社
上野　英吉

「百歩先の見える者は狂人扱いにされ、五十歩先の見える者の多くは犠牲者となる。十歩先の見える者が成功者となり、現在を見ることが出来ない者は落伍者となる」と古くから言われているが、先を見ることがいかに難かしいか過去をみれば歴然とする。そのため申年の「見ざる、聞かざる、言わざる」の逆で大いに勉強しなければと思っている。

激動の70年代であるということで始まった昭和45年から10年を経過し、振り返ってみると、まさに変化の多い年代だったと思う。

昭和55年から始まる1980年代は乱気流の年代とか不測の年代とか言われているが、確かに現在の国際情勢や、国内の政治・経済をはじめ色々な分野の状況をみれば、極めて難しい時代に入ってきたなと肌で感ずる此頃である。アメリカでは「不測の年代」ということで、「不測事態対応計画」というものが各企業で練られていると聞く、いくつかの不測の事態を想定して、今から対応策を考えて計画を作っておくそうである。我々は仲々そのようなことも考えられず、何としてでも企業が存続、成長出来るミニマムを経営計画にして環境がどうあれ達成していきたいという型しか出来ない。経営計画とかビジョン作りというのは市場そのものより、こうありたいという希望を具体的に表現するものだと思う。

「いかなる時代においても、その中に楽観的要素を見、それを生かそうとした人が繁栄した。悲観的条件に乗って自分の失敗も仕方がないという気になった人は失敗するであろう」(渡部昇一氏〝歴史的楽観主義のすすめ〟)と言われるように、何が起るか分らない、そして厳しい80年代なるが故にチャンスがあるのだ、と良い面を見つけて努力していきたい。自分の干支(えと)である今年が自分にとって充実した年であるために。

年男年頭所感

伊藤洋品株式会社
伊藤　淳蔵

1980年の幕あけ、私は年男、中年のスタートです。雪がない新年というものは何んとなく寂しいというか物足りない感がしました。新年を迎えるに当って、白銀の世界で祝える事ほど、新鮮な気持ちを持たしてくれる事はないのではないでしょうか。雪がなくて残念でした。

私はこのような感覚で本年のスタートを切った訳ですが、「石の上にも3年」という言葉がありますように、生まれて3度目の申年を迎えたという事は、やっと子供から大人の世界に足を踏み入れる事が出来たという感をいだいている次第です。

大人の世界に入るには、試験もいらず年が経てば入会させていただけるようで、自分には誠にありがたいのですが、反面これからの人生は日一日、私を取り巻く環境全てが私の試験官だと思って頑張ってみたいと思っています。

なぜかと申しますと、自分自身というものがはっきり判かっていませんが、判っている部分も何点かあります。自分が自分にほれている点もあるわけですが、それにも増してまだまだ数多くのいやな点（他人には良い点と見えても）をなんとか、自分が自分にほれるような点にしたいと思って新年を迎えました。

こういう事を考えましたのは、いざ過去35年間を振り返ってみると、はたして自分は何を目的に人生を歩んで来たのか、又歩んで来た人生の道程で何ヶ所かの節目（私の人生に於ける小さな目的の達成）があったのですが、思い浮かぶ節目は、ほんの2、3ヶ所で、過去の自分の人生はなんと「ふんわり、ふんわり」とたださまよっているだけの、味けない無気物のように思われてしかたがないのです。ですから先ほど述べました、「自分が自分にほれる点」を一つでも多く持ち合せる事が出来れば、それだけ自分にプラスになるのではないかと思われますので、例えば「遊ぶ事も一人前に出来なくて、一人前の仕事が出来るか」という言葉も、何か私に示唆してくれるように感じます。

言葉でいう事は簡単ですが、行動が伴わないのが現実です。「口よりも手が早い」の言葉のように、理論よりも行動を伴なった人生を送れるように努力したいと思っています。

欧州流通機構視察報告書

東和工業株式会社
黒崎　　猛

添付日程表及び視察団名簿の通り、金沢問屋センター近代化研究会の一員として欧州5ヶ国を視察する機会を得て、所定の日程を無難に消化し、全員無事故で帰国出来た事は実に幸いでした。

今回の視察に際し、予め各都市担当のリポータが定められていましたので甚だ拙いリポートでありますが私の感じたまま、見たままを我社の取扱商品に関連のある建設土木工事及び建設機械の実情に照して、更には乏しい知識しかありませんが、歴史的背景を主眼としてまとめてみました。

総じて、道路や建築構造物など建設工事現場の状況或は建設機械を日本と比較すると地震の無い為かも知れないが、非常に雑という感じは否めず、建設機械も日本の方が進歩している。日本の規格が随分厳しいと思った。

機会が無くて骨材プラント或は、生コンプラントを直接近づいて見学する事は出来なかったが、今回訪問5ヶ国の設備機械10ヶ所程眺める事が出来たのでドイツを除いて殆んど日本より遅れている感じで、フランクフルトで見た生コンプラントは日本と同程度のものと想定された。

現在、日本で使用されている鉱山機械はアメリカやドイツとの技術提携が多く、既に日本の技術が提携先のメーカーの技術を上廻っており、上述の両国以外の欧州諸国から殆んど取り入れるものが無い。亦、地震の無い事が建築構造物が簡単に出来る。経済力が伴わず日本ほど道路建設やビル建設が活発でない。歴史的背景もあり、欧州諸国には古い建物を温存する傾向があるなど上述の通りの様々な理由から改革精神の旺盛な日本の建設工事関連の技術がどんどん伸びて欧州諸国が遅れているものと思う。

而し、ドイツだけは別の感じでフランクフルトという一都市の視察で全体の判断は出来ないが、同市で見る限り、第二次世界大戦の戦火によって殆んど壊滅した事もあって、戦後近代的都市造りが行われ、日本の感覚に最も近い国であると思った。

更にフランクフルト周辺の高速道路網の整備は眼を見張るものがあり、ドイツの安定した経済成長の一端が見えた。更に高速道路の新設に際しては、国有地の森林を利用して意のままに建設可能だと聞くと、日本の現状即ち用地買収、住民公害対策などの難渋ぶりを思うと隔世の感がある。

僅か10日間の駆け足旅行で物即ち経済力という面から欧州諸国を論評する事は危険だがドイツ、オーストリアを除いて、彼等の日常生活、所得、住居、車、街並などから察するに日本人の現在の日常生活は随分ぜいたくで恵まれている事に感謝すべきだと思った。

私は米国を旅行していないので判断し難いが、恐らく現在、先進国といわれる諸国の中で日本、アメリカドイツの三国が最も経済的に優位である事が今回の視察によって、はっきりした気がする。反面、欧州諸国の伝統を重んじ歴史を重視する姿勢を日本人は再認識する必要がある。革新を好まず、古き良い物を生かそうとする民族意識は今後日本人として多いに見習うように努めたい。

特にパリ市内の老朽化した建物を壊さずに、街並と調和の取れるように保修しながら、街並の保存に努める姿勢には敬意を表せねばならない。亦、ローマ市内のホテルの前で今を去る400年程前に仙台の伊達政宗の家臣、支倉常長が主君の命を受けてローマに至りローマ法王の洗礼を受けた際に泊ったホテルだと聞かされ、更に当時のままの姿で営業を続けているという説明に歴史の重味と伝統を感じさせられた。

支倉常長の勇気と志に敬意を表すると同時に江戸時代の日本武士の風俗即ちチョンマゲ姿と二本差の刀を挾さんだ人物を想像すると何かユーモラスなものを感じた。

今回訪問の都市は何れも長い歴史と伝統を有するが何れも水利を利して商業都市として発展を続けて来たものでロンドンのテムズ河、パリのセーヌ河など観光の名所でもある。その河畔に昔と同じく水利を利して現代的な生コンプラントや骨材貯蔵サイロが、建設されているのには驚ろいた。日本ならはやばやと撤去命令が出る所だろうが、観光と建設機械が混然として生きている。